

» Vol.05

日本から世界へ —関係性をデザインする

今月号は、10月2日に東京証券会館にて開催した「日建連建築宣言特別シンポジウムBCS建築セミナー」の様をお伝えします。講師には建築家で東京大学教授の隈研吾氏を招き、「建築における世界と日本」というテーマで講演して頂きました。



隈研吾氏の講演の様子。スクリーンの映像は隈氏が設計した「水ノガラス」。

空間の重層性

隈氏は、まず日本建築の特色について幼少期に出会ったというブルーノ・タウトがデザインした木箱の話の口切りに解説しました。来日したタウトが、日本人の質感に対する優れた感性を高く評価した逸話や、歌川広重の浮世絵に見られる、背景や人物、雨などを等価に重層させてゆく画法から「関係性のデザイン」という特色を解説しました。そしてこれらの特色を実際の建築に応用したのが栃木県・馬頭町広重美術

館であると述べました。この美術館で表現された空間の重層性は、その後も隈氏の設計手法の中核をなし、素材の重ね合わせ、組み合わせから空間を構成する手法の展開を述べています。これは設計者と施工者が、一体となって築き上げた日本現代建築の歴史そのものであるといえます。

日本から世界へ

隈氏は、空間を洗練に向かわせる思想として、「原理主義にならないこと」の大切さを述べています。そして、日本建築は妥協の産物だからこそ純粋な空間体験が出来るのだと述べています。それを隈氏は、東京・根津美術館の軒裏を例にして説明しました。軒裏を張ることではじめて軒先の薄さは表現できるとし、そうした経験の積み重ねによって洗練へと向かうことができると述べています。

純粋な空間体験

日建連設計委員会委員長の河野晴彦氏が加わった対談では、主に海外での設計について意見交換が行われました。隈氏は、その地域で産出される素材や施工精度に合わせたデザインを採用することが、環境と調和した建築に繋がると述べています。日本と世界で設計する姿勢の同質性と違いを明快に示し、対談は締めくくられました。